

2020年6月NHK北海道地方放送番組審議会

6月のNHK北海道地方放送番組審議会は、17日(水)、NHK札幌拠点放送局において、11人の委員が出席して開かれた。

議事に先立ち、6月7日(日)に放送した「これでわかった！世界のいま」の内容について報告があり議事に入った。

会議では、まず、北海道道「道民の底力 わたしが乗り越えてきた“道”～世界的バレエダンサー・熊川哲也～」をはじめとして、放送番組一般について活発に意見の交換を行った。

最後に、7月の番組編成の説明と、放送番組モニター報告、視聴者意向報告があり、会議を終了した。

(出席委員)

委員長	山下 徹也	((株)グローバル経営センター 代表取締役専務)
副委員長	蛭田亜紗子	(小説家)
委員	今村 江穂	(認定NPO法人子どもと文化のひろば ぷれいおん・とがち 理事長)
	桐生 宇優	(北雄ラッキー(株) 代表取締役社長)
	倉本ひと恵	(オホーツクベーグル 代表)
	齋藤 拓也	(北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院 准教授)
	佐々木良榮	(デザイナー、(有)良栄・PLAN 代表取締役)
	成田 正夫	(ながぬま農業協同組合 代表理事組合長)
	西村 卓也	(北海道新聞社 論説副主幹)
	船山 大介	(特定非営利活動法人 No Limits 理事長)
	村田 博	((株)村田商店 代表取締役)

(主な発言)

<北海道道「道民の底力 わたしが乗り越えてきた“道”
～世界的バレエダンサー・熊川哲也～」
(総合 6月17日(金))について>

- 「久しぶりのスタジオ」というサブMC多田萌加さんのことばどおり、MC2人からとても意気込みを感じた。番組冒頭で、バレエダンサーの熊川哲也さんの歩みを紹

介していたが、10歳の少年がどんなきっかけでバレエを始めたのか、そこにも触れてほしかった。リモートでの対談という形だったが違和感なく見ることができ、熊川さんの魅力や北海道愛もよく伝わってきた。日々研さんを積んでいる熊川さんのことばはとても説得力があり、北海道の大自然で過ごした日々が芸術活動の源になっているのだと感じた。そして、日本で唯一の株式会社であるバレエカンパニーを設立したというのは非常に珍しいことなので、その経営面や運営面にも触れてほしかった。15歳のときのローザンヌ国際バレエ・コンクールの映像は本当にすばらしく、何度も見てしまうぐらい引き込まれた。熊川さんの人柄とその魅力に引き込まれた。スタジオの進行で北海道愛に持っていこうとするコメントもあったが、そんな必要はなく、熊川さんの話だけで北海道愛が十分伝わったのではないかな。

- スタジオからの生放送に、やや日常を取り戻したような安ど感とうれしさを感じながら見た。熊川さんが北海道出身だということを若い世代には知らない人もいたと思うので、広い世代に渡ってインパクトがあったのではないかな。熊川さんの逆境を乗り越えて歩む姿から新型コロナウイルスの影響を受け苦しんでいる道民に勇気と希望を与える構成だったと思う。その構成がシンプルで分かりやすく、伝えるメッセージはシンプルであることが重要なのだと感じた。MCの鈴木貴之さんの出身地である赤平市の話題で盛り上がっているシーンは、熊川さんが本当に北海道にゆかりのある人なのだととても印象的だった。そして、35歳で札幌の凱旋公演中に大けがを負い、3年間踊れない日々の孤独や絶望感の中で新しい作品を生み出すことの苦悩に、もっと触れて知りたいと思うほど興味をかき立てられた。大きな逆境を乗り越えた人ならではのことばにも非常に感銘を受けた。新型コロナウイルスの影響下で先の見えない苦境にある人たちに、世代を超えて勇気を与えたのではないかな。北海道ゆかりの偉大なアーティストとしての熊川さんの特集番組を今後もぜひ期待したい。
- 短い時間の中でも熊川さんの人となりが大変分かりやすくまとめられており、鈴木さんとの対談も見ていて心が和んだ。だが、熊川さんがバレエカンパニーを立ち上げたという話は、もう少し詳しく知りたかった。現在48歳という年齢で、演出家・指導者として後継者を育てているが、踊れずに不安になっているダンサーを思うことばには、私自身もとても勇気づけられ感銘を受けた。また、「いい景色を見た感動をバレエに重ねてほしい」ということばからは、北海道の雄大な景色を常に心に留めながら表現しているのだと感じられて、これからも応援したくなった。35歳のときに大けがで挫折を経験し人生の大きな転換を迎えたが、挫折を通じて大きく花開くこともあるのだと改めて感じた。
- もっと長時間のドキュメンタリー番組にできるのではないかなというくらい、鈴木

さんとの楽しい語りを通じて、熊川さんの魅力が番組全体から伝わってきた。世界的バレエダンサーの心の源流が北海道であると初めて知った。新しい挑戦に向かう熊川さんにのしかかる重圧をリセットするのも、故郷である北海道なのだと感じた。札幌の凱旋公演での大けがを乗り越えて、バレエ音楽ではないベートーヴェン「第九」の舞台化にチャレンジするなど、常に前を向いて歩くその姿勢には感服した。熊川さんが15歳で渡英するときの決心と家族の思いにも触れられていれば、もっと分かりやすかったのではないかな。また、若いダンサーに向けた「1年なんて人生の中では短い、いい時間だと捉えれば」という考えに励まされた方もいると思うが、今はこの新型コロナウイルスの影響で経済的に1年も耐えられない人たちも多くいるので、その人たちの心にはどう響いたか、気になった。

(NHK側)

熊川さんがバレエを始めたきっかけは、親戚の女性の影響を受けて始め、やってみたら「才能がある」と指導者に見込まれたとのことだ。そういった部分にも少し触れられたらよかったかもしれない。熊川さんは北海道の現状を非常に心配されており、何とか北海道を勇気づけたいという思いから、北海道について非常にたくさんのお話を語ってくださったのでそちらを重点的に取り上げた。経済的に1年も耐えられない人、苦境にある人への配慮については、今後も意識していきたい。

- 熊川さんが北海道出身ということを知らない視聴者にも、北海道愛にあふれた方であることを改めて知ってもらおう本当によい機会になったと思う。リモートの対談だったが、見ていて全く違和感がなかった。自分たちが住んでいる場所の本当のよさをふだん感じることは難しいと思うが、熊川さんのコメントで北海道のよさに改めて気づかされた。豊かな感受性とものおじしな性格を育み、苦しい時期の熊川さんを支えたのは北海道なのだと、世界的バレエダンサーになっても忘れないでくれているのは、北海道に住む者にとってうれしいことである。そして、「ひらがなのくまかわてつやに戻れる」ということばは、熊川さんでなければ言えないことばではないか。熊川さんのコメントは心に刺さるものが多く、どんな状況にあっても前を向くというメッセージは伝わった。これから「北海道道」を続けていくに当たり、番組のひとつの形が今回の対談企画で見えたのではないかな。
- 久々のスタジオからの生放送は、画面からその喜びや安ど感などが感じられ、明るい雰囲気を見てほっとした。対談はリモート収録だったが、熊川さんと鈴木さんが向き合うような形の画面構成はタイムラグを感じることなく、とてもきれいに編集され

ていた。そのテンポのよさが対談の勢いを伝えており、エネルギーをもらえた。また十分に時間を取って熊川さんの歩みなどを紹介しており、熊川さん知らない人にも分かりやすい構成だった。だが、北海道というキーワードにこだわり過ぎている部分があった。北海道といってもいろんな地域があって、その中に多様性がある。熊川さんにゆかりのあるところとそうではないところがあるのに、全部ひっくるめて「北海道の癒やしの力」と言われるのはざっくりし過ぎているという印象を受けた。実際に熊川さんにとって自然がいかに関心なものなのか、それを語っているところを見せてもらえたらすっと腹に落ちたかと思う。

- 熊川さんのことを知らない人にも、きちんと伝わるように番組が作られていると感じられた。今の新型コロナウイルスの影響下で、少しずつ経済活動も動いてきたが、夢や希望を視聴者に与えるという意味ではとてもタイミングがよかった。芸術をベースにしたビジネスは人並み以上の努力が必要なのだろうと興味を持ったので、熊川さんがバレエカンパニーで実際にどのようなことを行っているのか、もっと掘り下げて見たかった。MCの鈴木さんも本来の持ち味を出しており、高揚感もはっきり伝わってきた。
- 事前に何度か番組予告を見ており、世界で活躍するバレエダンサーが北海道愛を持って活動しているということで期待して視聴した。予告で言っていた「僕の北海道愛は半端ない」ということばがいつ出るのかと注目して見たが、結局それが何なのか最後まで分からなかった。また、「いい景色を見た感動をバレエに重ねてほしい」と言っていたが、好きな景色をバレエで表現するとどのようなようになるのか。そういう具体的な例があれば、バレエをよく知らない人たちにももっと分かりやすかったのではないか。心の中に北海道が常にあり、それがどのように活動に生きているのかというところまで聞けるとよかった。25分という限られた時間の中ではあるが、熊川さんのバレエと北海道という部分を、もう一步踏み込んでもらえるとよかった。
- 熊川さんのものおじしない性格と感受性は、富良野市で農業を営んでいた祖父のいる所で、人と自然に触れたことで養われたということが分かった。そして、15歳で渡英したときも北海道を心のよりどころにし、さらにあふれんばかりの北海道愛が身に付いたということもしっかりと伝わった。熊川さんは自身を“十点集中型”と言っていたが、見たものを体現できる能力にとっても優れていた人であり、経営者・演出家という環境が、自分がやりたいことを突き詰める人に成長させたのだと感じた。番組では、設立したバレエカンパニーは順風満帆に見えたが、そうではない部分もあったと思う。35歳のときのけがによる絶望の中、逆境を乗り越えて一から出直そうと「第九」を舞台化した際には非常な苦労があったのではないか。そういうところももう少

し見せてもらえると、番組の魅力がさらに増したのではないか。新型コロナウイルスの影響によって、バレエのレッスンや公演もできなく足踏み状態になっているが、「道端の花を見て感動するように自分たちの活動を見直したり、自分たちに何ができるかを考えたりする時間になれば」という熊川さんの思いには感銘を受けた。熊川さんの人となりを通して、見ている人の力になる非常にすばらしい番組だった。

- なぜ今、熊川さんを取り上げるのか不思議に思いながら視聴した。どんな状況にも飛び込んで、苦境を乗り越えてきたその強さとエネルギーが長引く新型コロナウイルスの影響で疲弊している今の時代に光となって照らしてくれる、そんな視聴者の気持ちを明るくしてくれる魅力が詰まっていた。なぜこの時期に取り上げたのかを納得させられる、とても力強く説得力のある内容だった。15歳の時のローザンヌ国際バレエ・コンクール映像を含め、バレエの美しい映像もふんだんに使われていてとても引き込まれた。番組終盤、現在の状況では興行を行う経営者としてかなり厳しい状況や不安があるはずなのに、真っ先に稽古で踊っていないダンサーたちを気にかけることばはとても印象的だった。この状況でどっしりと構えているのはすごいと思う一方で、実際の経営面や今後の公演の在り方も考え直す必要もあると思う。その辺の話についてももう少し聞きたかった。全体的にとっても引き込まれる、とても気持ちが明るくなる番組だった。
- 番組を見る前は、熊川さんの人生を振り返りながらの対談とは重い内容かなと感じていたのだが、実際の対談の内容は今の道民を元気づけるものであり、熊川さんの語り口もとても聞きやすかった。内容はもちろん、理路整然と語る姿勢に共感できる視聴者がとても多かったのではないかと。今回の「北海道道」のテーマは、大きな試練を乗り越えて生きていく熊川さんの姿勢を通して、新型コロナウイルスの影響下にある道民をいかに勇気づけられるか、という点にあったと思う。25分という短い番組で熊川さんの人生や会社の経営を深く掘り下げていくのは難しかったとは思いますが、番組としての訴求力は非常にあり、テーマは十分達成されたのではないかと。熊川さんのことばはとても印象的で、私も非常に勇気づけられた。番組はまだ試行錯誤の段階だと思うが、私たちの知らない北海道をこれからもどんどん視聴者に知らしめてほしい。

(NHK側)

熊川さん自身が「芸術活動の源」、「その源になったのは幼い頃育った北海道の自然の美しさ」とおっしゃっており、対談の中でもその部分が一番盛り上がっていたので、番組ではそこを核に構成した。一方で、大まかに「北海道」としてまとめてし

まったところもあったかもしれない。また北海道の自然と熊川さんのバレエとの関係についても、もう少し具体的にどのような景色が影響しているのかなどについても触れられれば、さらによくなったかもしれない。指摘は今後に活かしていきたい。

<放送番組一般について>

- 5月22日(金)の北海道道「今こそ届け“スポーツの力”」を見た。北海道のプロ野球チームについては、印象的な出来事がたくさんある年の中で、2009年の新型インフルエンザに苦しめられた年を取り上げたのはタイムリーだと感じた。多くの選手が新型インフルエンザの感染により離脱していく状況で、とにかく耐えて最終的にリーグ優勝を成し遂げるといった内容は今の状況と重なる部分があった。そのときの監督が梨田昌孝さんであり、梨田さんのつぶやきどおりに試合が展開していくのは、とてもドラマチックで震える内容だった。番組では新型コロナウイルスに感染し、長い入院から回復したばかりの梨田さんの電話インタビューもあり、厳しい状況から回復されて本当によかったと思った。同じく北海道のプロサッカーチームについても、全く波に乗れなかった状況から試合後のサポーターの激しい抗議によって奮起し、ついにJ1昇格を成し遂げるといった展開はドラマチックで、テンションが上がる内容だった。スポーツに詳しくない方も楽しめて、それぞれのファンにとっては懐かしく感動がよみがえるであろう内容は元気が出て明るくなった。とても魅力的な番組だった。
- 5月29日(金)の北海道スペシャル「どうする?“コロナ時代” #シラベルカ特別編」(総合 後7:30~8:41 北海道ブロック)を見た。生放送で、画面の右側にSNSの投稿が映し出されていたが、文字が小さく見づらく、ただライブ感を演出しているだけという印象だった。道民がどんな思いでいるか、それぞれの立場の人の問題点は分かったが、生放送である必要があったのか疑問に思う。ゲストのコメントからも何か新しいことを得られた気もしなかった。秋元克広札幌市長が出演しており、札幌市中心の話題になるのはしかたがないが、各自治体ごとに対策や支援の違いがあると思うので、札幌市以外の各自治体ではどのような対策を執っているのかという情報も重要だったのではないかと。また、秋元市長が話をしているときのBGMがとても違和感があった。このような番組は、冷静に情報を伝えることが大事であり、危機感をあおるような演出は不適切なのではないか。東川町の雇用に対しての取り組みなど非常に興味深い内容もあったが、全体として危機感と不安感だけが残り、番組の内容が伝わらないという印象だった。大きく3つのテーマに分けていたが、内容を絞ったほうがよかったのではないかと。

(NHK側)

SNSで意見を募集する際に、いろいろな意見を言ってもらいたいことと見やすいことのバランスを考えて、投稿は60字に制限するなど、寄せられた意見を番組の中で分かりやすく紹介できるようにしたが、今後も改善できるように検討を続けていく。

- 行政も経済も手探りで進んでいる中、視聴者にどのような不安や意見、怒りなどがあるかを可視化して共有する場をメディアが作ることはタイミングとしてよかった。その視聴者からのメールやSNSの意見をどれだけ真剣に取り上げるのか、それが重要だ。せっかく上げた声をきちんと取り合ってもらわないと意味がないが、番組では野村優夫アナウンサーが視聴者の意見をもとに秋元市長に聞き直す場面もあり、対応できていた。いろいろな不安が出ているのに対して、それなりの答えがある程度出ていて、どこでどういうことが起きているのかというのが分かったような気がした。
- 「シラベルカ」については、夕方のニュース番組の中の1コーナーでやるにはよくても、1時間以上の番組としては少し単調だった。また、画面もスタジオとリモートのゲスト、コメントなどの文字情報などでごちゃごちゃしていて、それで集中力を妨げられたように感じた。秋元札幌市長、教育評論家・法政大学名誉教授の尾木直樹さん、リゾートホテルグループ代表の星野佳路さんが参加されていたが、番組は医療の話から始まっていたので、できれば医療の専門家もこの場にいたほうがよかった。どの話題も問題提起で終わっていて、番組としても若干残念だった。
- 6月12日(金)の北海道道「密着 北海道医療センター～“コロナ専門病院”で何が起きたのか～」を見た。第2波が来たとも言われている状況で、小型のアクションカメラを装着しながらの医療行為は大変だったのではないかと感じた。感染症を専門とする病院でも治療は手探りであり、相当な労力がかけられていることがよく分かった。また、アビガンは投薬1日目に18錠飲む必要があり、体力が低下している患者は飲み込めないケースがあるということも初めて知った。介助を必要とする高齢の患者には、看護師が看護と介護を兼任していた。みずからも感染する可能性がある状況で、懸命に治療に尽力している医療従事者には、賛辞と感謝の念を覚える。
- 第2波が発生したと言われている時期に新型コロナウイルス対応に尽力した病院を対象に取材した番組で、大変貴重な映像が多かった。それぞれの地域で感染の拡大状況や深刻さは違うが、北海道の中でどういうことが起きているのかを視聴者が知る

いい機会になった。特に介助が必要な高齢患者のケアは、想像を大きく上回る労力が必要とされ、感染リスクだけではない部分でも非常に苦勞していることがよく分かった。「うちの病院は公的な使命を果たしてなんぼのもの」と話していた北海道医療センターの菊地誠志院長のことばからも、医療従事者のきょうじが感じられ、非常に印象深い番組だった。しかし、病院の経営が今年度5月までの累計で6億円近くの赤字に転落する見通しだという情報は非常にインパクトが大きく、今後どのようにして解消していけるのかとても気になった。以前の「北海道クローズアップ」では厚生労働省が北海道の病床数削減を進めていることを取り上げていて衝撃を受けた。私たち一人一人に感染しないよう気をつけましようと呼びかけるのは分かるが、社会全体としてこういった問題をどういうふうにかえるのか。そこをこの番組の流れからももう少し問題提起してもいいのではないかという印象を受けた。

- 小型のアクションカメラの映像がひとつの記録映像として残るような内容だった。多くの項目について取り上げていたが、とても分かりやすくうまくまとまっていた。また、病院の赤字の問題に対する補足情報として、野村優夫アナウンサーは第2次補正予算が成立した話をしていた。伝えるべき情報もしっかり伝えておりよかった。
- 医療現場を小型のアクションカメラで撮影し、現場の大変さ、段階的に変化する状況が分かった。第1波のときと違い、第2波は介助を必要とする人たちの入院が多く、看護師が看護と介護を兼任している大変さがよく伝わってきた。また、病院の経営についても、赤字の見込みになっているのは北海道医療センターだけではなく、ほかの病院も同じような傾向だと思うので、その辺もデータとして見せてほしかった。以前の「北海道クローズアップ」だったら、もっと深く掘り下げていたのではないだろうかとも思った。

(NHK側)

北海道医療センターの取材は4月下旬から始め、患者たちが治療を受ける病棟の感染症センターの撮影は、医師や看護師をはじめ、病院全体に協力いただいた。「いかに現場がしれつな状況にあるか、生の映像で伝えてほしい」という、菊地院長はじめ病院全体の意見は本当に貴重なものだった。小型のアクションカメラを回収する際などは、医師の指導のもと、細心の注意を払いながら安全に配慮して取材した。病院の経営面の問題については、今後引き続き取材を進めていきたい。

- 5月30日(土)のE TV特集選「7人の小さき探究者～変わりゆく世界の真ん中で

～」を見た。全国に先駆けて p 4 c (子どものための哲学)に取り組んできた気仙沼市の小泉小学校6年生の7人の対話が映し出された大変貴重な記録だった。当時、宮城県内に1人も感染者がいない状況で、明日から学校が一斉休校になるかもしれないと告げられた子どもたちのやり場のない怒りや悲しみの姿は、ありのままの子どもたちの姿を突きつけられた感じがした。なぜ子どもの意見は聞いてもらえなかったのかという声や、休校中の子どもたちの無力さ、感情がまひした虚無感をまとった姿は、本当に心を打つものがあった。子どもと一緒に課題に向き合う姿勢を大切にすることを再確認できるすばらしい番組だった。教育・医療・福祉など、これまで経済最優先で作られてきた社会が見落としてきたものを、このように番組として伝えてもらうことで子どもや教育のことなどを見つめ直すきっかけになったのではないかと感じた。

- 5月21日(木)のこころの時代～宗教・人生～セレクション(3)「地の底の声 筑豊・炭鉱に生きた女たち」(Eテレ 後 10:00～10:50)を見た。コロナの時代に見つめ直したい問題を厳選したシリーズということで、興味を持って視聴した。大正から昭和にかけて炭鉱で働いていた女性たちの話を聞き書きしていた井手川泰子さんが保存しているカセットテープから、暗い地底で死と隣り合わせで働いていた女性たちの姿をたどっていくという内容で、見ていて何度も涙があふれた。番組の終盤で炭鉱で生きた女性たちの歌が紹介されていたが、腰巻き1枚での肉体労働、事故や死が身近な環境、炭鉱の外の人たちからの差別、そういう苦しみで泣きたくなかったときこそ歌って楽しい気持ちに変えるという炭鉱の暮らしが、すでにこの世にはいない女性たちの叫びとして伝わってきた。感情が揺さぶられる、とてもすばらしい番組だった。
- 6月7日(日)の「これでわかった!世界のいま」の問題になった動画を見た。ひとつの演出として分かりやすく伝えようとしているのだと感じた。センシティブな問題を報道するときに、気をつけなければならないということは当然だ。ただ、分かりやすいように説明しようとした結果であると謝罪した上で、動画は削除しないといった手はなかったのだろうか。
- 人それぞれで多様性があるものなので、さまざまな意見があることはかまわない。だが、SNSに上げられるようなことに関しては、放送する側として決して傲慢なイメージを取られないような放送をしてほしい。問題となった動画については、とても安易なイメージで表現をしていたのではないかと。黒人やほかの人種の人たちを表現するのに、ありきたりなイメージを持って放送するというのはやはり軽率だったのではないかと。
- 今後どのようにSNSとつきあっていくのか。今回のような場合に番組でどう取り

上げるのか、その基準をどこに置くのかはとても大事な問題である。

(NHK側)

今回は番組のごく一部を切り取り、SNSで発信したところ
様々な批判をいただく結果となった。SNSとのつきあい方、
向き合い方を今後検討していく。

- 6月7日(日)のBS1スペシャル「ヒグマを叱る男～完全版36年の記録～」を見た。漁師の大瀬初三郎さんが、人もヒグマも雄大な自然の一部という心情で自然と対峙している姿は、同じ北海道でも私たちはなかなか目にすることができないものだった。そして、映像美にも非常に感銘を受けた。アメリカの自然保護の権威である、国際自然保護連合のピート・ランド博士の大瀬さんとの考え方との対比も非常に考えさせられた。今後、大瀬さん以外の人間がヒグマと共存することが可能だろうかと考えさせられた。評判どおりのすばらしい番組だった。
- 大瀬さんの人柄、ヒグマとの距離の取り方を詳しく見ることができた。北海道に住んでいてもヒグマと遭遇することはめったにないので、ヒグマと共存している人がいることを知るのは大事なことだと思う。高齢の大瀬さんが、今後番屋の維持をどうしていくのかという課題もあると思う。NHKでなければ、36年間も1人の人物を取材していく番組作りはできなかったと思う。今後も大自然の中で生きる人たちを取り上げてもらいたい。
- 猟友会に支払う報酬の調整がつかず、ヒグマの駆除ができていない自治体もあると聞く。このような状況においては、放送を控えるべきではなかったか。番組の完成度と感動は確かにある。だが、放送を見て番屋まで行く人、またヒグマが近づいてきても脅せば回避できるだろうと思いついでしまう人がいないとも限らないと思った。
- 6月14日(日)の「函館発！オンラインでつながるラジオ」(FM 後2:00～4:00 北海道ブロック)を聞いた。ゲスト全員がインターネットでリモート出演するというチャレンジングな番組で楽しみにしていた。ゲストも多彩で、さまざまな立場の方から、さまざまな境遇に置かれていることを聞いたのは、非常に有意義だった。北海道に住んでいる人、離れていても思いを寄せる人など、本当に多くの人々の思いが北海道を作っているのだなと改めて感じる事ができた。ただし、リモートのタイムラグや音がこもるという点は気になった。だが、リモートでもラジオ番組は十分成立するという可能性も広げた番組だったと思う。今回は函館に話題が偏りがちになったが、北海道各地で同じような取り組みがあれば地域がつながるきっかけ作りができると思

う。今後にも期待したい。

- 「チョコちゃんに叱られる！」の出演者の民放ラジオ番組での発言は不適切だったと思う。ただ、深夜の生放送のラジオ番組で話したことが原因で、ここまで社会的に追い詰められるのかと思った。NHKにはこの先、繊細な話題も怖がって触れないという形ではなく、何がいいのか悪いのかということを深く議論する番組も制作してほしい。

(NHK側)

5月の番組審議会で指摘いただいた、この問題を検証するような番組を制作するなどの対処のしかたがあったのではないかという意見は、東京の制作部局に伝えた。外部の専門家も入れて議論したが、他社のラジオ番組での発言であったことから、最終的にNHKでは番組からのおことわりとコメントをつけて放送するという結果になった。意見を共有して、今後に生かしたい。

(NHK側)

5月の番組審議会で見聞のあった4月23日(木)バリバラ「バリバラ桜を見る会～バリアフリーと多様性の宴(うたげ)～第一部」の再放送を差し替えた件についてお答えする。差し替えて再放送したのは4月2日(木)に放送したバリバラ「新型コロナ“自粛”検討会議」という回である。新型コロナウイルスの感染状況を見た上で判断した。再放送することで、NHKプラスでの見逃し番組配信でさらに同番組を長く見られる環境にもなるという判断だった。

NHK札幌拠点放送局
番組審議会事務局

2020年5月NHK北海道地方放送番組審議会

5月のNHK北海道地方放送番組審議会は、20日(水)、NHK札幌拠点放送局において、11人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、「2019年度北海道地方向け放送番組の種別ごとの放送時間」について、報告があった。

続いて、北海道道「動物園から“癒やし動画”の贈り物」をはじめとして、放送番組一般について活発に意見の交換を行った。

最後に、6月の番組編成の説明と、放送番組モニター報告、視聴者意向報告があり、会議を終了した。

(出席委員)

委員長	山下 徹也	((株)グローバル経営センター 代表取締役専務)
副委員長	蛭田亜紗子	(小説家)
委員	今村 江穂	(認定NPO法人子どもと文化のひろば ふれいおん・とから 理事長)
	桐生 宇優	(北雄ラッキー(株) 代表取締役社長)
	倉本ひと恵	(オホーツクベーグル 代表)
	齋藤 拓也	(北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院 准教授)
	佐々木良榮	(デザイナー、(有)良栄・PLAN 代表取締役)
	成田 正夫	(ながぬま農業協同組合 代表理事組合長)
	西村 卓也	(北海道新聞社 論説副主幹)
	船山 大介	(特定非営利活動法人 No Limits 理事長)
	村田 博	((株)村田商店 代表取締役)

(主な発言)

<北海道道「動物園から“癒やし動画”の贈り物

(総合 5月15日(金))について>

- テレビをつけると新型コロナウイルスの話ばかりの中で、「コロナ疲れの皆さんに癒やしの企画を」という冒頭のコメント通り、本当に癒やされた番組だった。全国の動物園が動画配信をしていることは知っていたが、いろいろな趣向を凝らしているのだなと感心した。動物による癒やしとは別に、飼育員の方が今の自分たちにできるこ

とは何かということを考え、動画を作るために頑張っている姿を見て、私自身も勇気づけられた。ただし、円山動物園園長の声が聞き取りづらいところがあり残念だった。メインMCにタレントの鈴井貴之さんを起用したことについては、分かりやすく北海道の魅力を紹介してくれることが期待できた。オープニングの映像や音楽も好感が持てて、「北海道道」のコンセプトが伝わってくる番組だった。

- 長期休業を余儀なくされた円山動物園の動画配信の取り組みを紹介していたが、動物の管理という本来の仕事以外にも奮闘する様子がとても印象的だった。園長の話が少し聞きづらかったが、休園中の予算繰りをどうするかなど、視聴者が応援できることは何かないのかという思いになった。園長は動物園の存続が地球にとって大事なのだという話をされていたが、そのことについてももう少し詳しい、分かりやすい話があってもよかった。入場者あつての動物園で本来の役割が発揮できない中、現場の方々がこのような形で動画を作っている活動の様子は見ていて励まされ、とても勇気づけられた。

(NHK側)

園長の音声聞き取りづらかったという指摘に関しては、マイクがうまく機能せず、結果的に聞き取りづらいところがあった。指摘は真摯(しんし)に受け止めたい。「北海道道」は番組のスタート時点から、コロナ禍での番組制作となっていて、しばらくはリモート出演や感染症対策を行ったうえでの制作が続く。指摘を受け止め改善できるところは行っていきたい。

- 自粛や休業要請などで経済状況が悪化しているなどネガティブなニュースが多い中で、動物園の飼育員が毎日頑張っている姿を取り上げたことはタイムリーで、大変心が温まりよかった。番組ではSNSを通じて視聴者とやり取りができる形になっていたが、視聴者のコメントがなかなかスムーズに反映されなくて、少しもどかしいところもあった。参加型の番組は以前からよいと思っていたので、これからどのように展開していくのか楽しみである。だが、鈴井さんの持ち味が番組では生かし切れていないように感じたので、寄せられるコメントに対して返答する時間を設けるなどすれば、もう少し番組に動きが出てくるのではないか。
- 単純に動物たちのかわいらしい動画を流すだけではなく、飼育員のみなさんが苦勞して動画を作っている様子を取り上げたことはよかった。コロナに関する情報ばかりで、気持ちがめいってしまいがちな中、かわいらしい動物を見ると気持ちが和む。声の聞き取りづらさなど、リモートでの生放送が大変であることが見て取れた。これか

らコロナ禍のもとでどのような番組を作っていくのか、NHKのアイデアに期待している。

- 家で自粛している中、動物たちに癒やしてもらえるととてもタイミングのよい番組だった。SNSとの連携も、視聴者に興味を持ってもらうという意味においては大変よい取り組みだと思う。しかし、番組全体としてはさらりと流れてしまった印象だ。ふだんは見るできない円山動物園で行われている飼育などの舞台裏や飼育員の苦労は何となく分かったが、できればもう少し深掘りできたら、もっと引き込まれる内容になったのではないか。また、鈴井さん本来のキャラクターが生かし切れていないのが残念だった。サブMCの多田萌加さんが笑顔で対応しており、しっかりと支えている印象を受けた。
- 人と人との接触を極力抑えた中で、この番組が作られたということがよくわかった。円山動物園の飼育員が動物園の裏側を見せてくれたことで、今までの動物園の見え方とは違う楽しみ方を感じられた。飼育員の業務をしながら撮影も行い、どこをどう伝えるかというのは大変な努力が必要だと思う。だが、動画でふだん見ることのできない動物の生態について学ぶことができてよかった。私たちもそれぞれの職場で、自分たちでできることをやるべきだと思った。鈴井さんのメインMCへの起用は、北海道の魅力を明るくユーモア満載に伝えてくれることが期待でき、これからも楽しみだ。
- 休園中の円山動物園の飼育員の努力や工夫で、ふだん見られない動物の様子やしぐさなどを見ることができてとても面白かった。コロナウイルスが動物にも感染するという事例が報告されており、動物の体調管理や経費など、動物園がどのような状況に置かれているのかも分かる内容になっていた。また、全員が現場に居合わせなくても、息を合わせ、暗い雰囲気にならないようにはっきりと明るく伝えていくという基本的な姿勢がとてもよかった。番組制作サイドと視聴者との間に鈴井さんと多田さんが入ることで生まれるリズムがあるのだと、ここ数回の番組を見て感じた。多田さんの番組に対する意気込みがよく伝わってきて、番組の雰囲気が固まりつつあると感じる。これまでの「北海道クローズアップ」と比べて、情報量は減っているかもしれないが、視聴者が無理せずついていけるペースになっている。
- 新型コロナウイルスに関連するニュースばかりの中で、今回の番組は一服の清涼剤として安心して視聴できた。番組の制作にあたり、さまざまな制約がある中で、今できることを精いっぱいやっていることがうかがえた。動物園や水族館は公共性の高い施設だと思うので、緊急事態宣言の解除後はそれらを応援するような番組も今後あるといいのではないか。メインMCの鈴井さんは今後さらに鈴井さんらしさが出てくる

のではと期待している。サブMCの多田さんの年齢やアイドルという肩書からは想像できないほど落ち着いて司会をする姿に驚いた。スタジオの外に出てレポートする姿などもぜひ見てみたい。また、これからの「北海道道」について、番組の方向性について何かイメージがあれば教えてほしい。

- 動物園とは一体何なのか、何のために動物園はあるのかということを考えながら見た。動物を来た人に見てもらおうというのが第一の目的で運営されていると思うので、苦勞して飼育しているのに誰も見に来てくれないという今の状況は相当つらいのではないか。また、全国の動物園で個性を競い合うような状況の中、円山動物園の一番の売りは何かということを知りたかった。メインMCの鈴木さんはこれまでの経歴である程度キャラクターが確立している人なので、今までほかの番組で見せてきた姿を継続していくのかが気になる。一方で、「北海道中ひざくりげ」や「北海道クローズアップ」などといったNHKのアナウンサーや記者が伝えてきた番組との差別化をどのように考えているのかを知りたい。今後どうやってNHKの番組として定着させていくのか非常に期待している。
- コロナウイルスと全く違う明るい話題を持ってきてもしらじらしさを感じてしまう状況下で、ちょうどよいバランスだった。リモート中継のもどかしさ、映像的な寂しさを円山動物園のイメージキャラクターを出演させる工夫で盛り上げていたのはとてもよかった。多田さんは新鮮な印象でかつしっかりとした安定感もあり、ぴったりの人選だと思う。視聴者からのSNSでは同じ方が繰り返し投稿している印象があった。瞬時に選ぶのは難しい作業だとは思いますが、できるだけ違う人を取り上げたほうが、にぎやかな感じが出るのではないか。苦境の中でもできることから工夫して行っている飼育員の姿に励まされたが、動物たちがどう過ごしているのかという話も聞いてみたかった。ただ、「癒やし」というのは受け取る側が感じるもので、MCの2人が「癒やし、癒やし」と繰り返し言っていたのが少ししつこく感じた。
- 休園中の円山動物園の動物の様子を通して、人々と自然をつなぐ動物園という組織がさまざまな苦勞を背負いながらどのように生き残っていくか必死にもがいている姿を見ることができた。番組の構成も非常に温かい視線で表現されており、心温まる題材で大人も飽きさせない構成になっていた。今回のように、今まで当たり前であった取材のしかたが、当たり前ではなくなっている。一方で、今後新しい方向性を試行錯誤する時期になっているのではないかとも思う。長く続いていく長寿番組になってもらいたいと思うので、これからもさまざまな挑戦をしてもらいたい。

(NHK側)

いただいた意見を参考に番組をブラッシュアップしていきたい。番組の方向性についてだが、「北海道道」という番組はいろいろな角度から「北海道」というものを見ていくことを目指しているの、報道番組のようなスタイルの回になることもあるだろう。多様なテーマを多様な演出で試していきたい。番組MCとともにチャレンジしていく。NHKの番組作りもこの状況にどう適応していくかに直面しているので、今後も試行錯誤を続けていく。

<放送番組一般について>

- 4月24日(金)の北海道道「流氷の海 秘密に迫る男～水中カメラマン・関勝則～」を見た。関さんも初めて訪れた「流氷の墓場」が作る自然を美しい映像で見ることができ、生き物たちが共存している様子を詳しく知ることができた。流氷は海を閉ざしてしまうという印象があったが、実は流氷に含まれるミネラル物質を求めていろいろな生き物が来るといことも知り、大変勉強になった。関さんのことばや撮影スタイルは自然を大切にし、ありのままを美しく表現していてすばらしかった。ただ、番組が短かったので、もっと長く映像が見られる番組も期待したい。北海道の自然について共に知ろう、という番組のメッセージは、多くの人たちにも伝わったのではないかな。関さんが自宅からリモートで出演されており、カメラなどの機材も少し紹介されていたが、もっと自宅や機材の様子を映してくれたらよりリアリティーがあって楽しかったのではないかな。
- 関さんは魅力がある方で興味深く視聴したが、25分という時間ではもの足りなく感じ、もっと話を聞きたかった。ただ、番組が生放送である以上、何かしらタイムリーな要素が必要だと思うので、生放送のレギュラー番組で取り上げる内容なのだろうかという疑問も残った。揺るがない雄大な海の映像には救われるところもあったが、一方で現在の人間社会とつながるフックのようなものを表現できれば、番組により深みが出てよかったと思う。

(NHK側)

「流氷の墓場」という貴重な映像に重点を置いたため、関さんの魅力を伝える部分が少ないと感じた方もいたかもしれない。しかし関さんの自然のありのままを撮影しようとする考え方やそれを支える技術については、視聴者に伝わったのではな

いか。

- 5月15日(金)の「ほっとニュース北海道」を見た。秋元克広札幌市長がスタジオ出演した回で、視聴者からの質問に答えていた。新型コロナウイルスの感染者に再陽性反応があったという正確な情報を得られた。「ほっとニュース北海道」は道内の正確な情報を得られる非常にいい番組だと感じた。それぞれの地域で商売をしている多くの人たちが、営業自粛や休業をしながら耐えているということを今後もしっかり伝えてほしい。

- 「ほっとニュース北海道」をほぼ毎日見ている。新型コロナウイルスに関するNHKの報道や情報の出し方は本当にしっかりしていると感じている。民放の番組やインターネットの情報というのは地域の情報がとても少ないので、インターネットに勝る情報を得ることができるのは地域ニュースだと実感している。また、NHKの新型コロナウイルスに対しての番組での取り上げ方や情報の裏付けはしっかりなされていると感じる。また、NHKのホームページに掲載されている特集ページも、使いやすく作り込まれていると感じた。

- 3月22日(日)のNHKスペシャル「“パンデミック”との闘い～感染拡大は封じ込められるか～」(総合 後 9:00～10:05)を見た。政府の情報発信が少なく、はっきりしない時期に、NHKは多くの人を知りたいと思っていることに応えていると感じた。厚生労働省の感染症対策専門家チームに密着取材をして、日本国内のコロナ対策がどのような考えに基づいて、どのようなことを考慮して行われているのかということをも明らかにしていた。

4月11日(土)のNHKスペシャル「新型コロナウイルス 瀬戸際の攻防～感染拡大阻止 最前線からの報告～」(総合 後 9:00～10:04)を見た。専門家チームがどのように行政に助言をして働きかけていたのかを知ることができた。ただ、専門家チームが伝えたことを政府がどう解釈しているのか、政府はどのように考えているのかが全く明らかにならなかった。専門家の人たちが政治的な責任を過剰に負わされるような印象も受けるので、政府がどのような役割を果たしているのかをもっとはっきり伝えてほしいと感じた。

- 5月3日(日)のNHKスペシャル「調査報告 クルーズ船～未知のウイルス 闘いのカギ～」(総合 後 9:00～10:10)を見た。新型コロナウイルスの集団感染がおきる仕組みを分かりやすく表現しており、なるほどと思うような実験が紹介されていた。感染予防の観点からとても有益な情報を得られた、大変有意義な番組だった。

- 5月17日(日)のNHKスペシャル「新型コロナウイルス ビッグデータで闘う」(総合 後9:00~10:10)を見た。京都大学IPS細胞研究所所長・教授の山中伸弥さんが中心になって解説しており、日本を代表する各分野の専門家の生のコメントはとても説得力があった。不安をかきたてるだけではなく、急速に悪化するメカニズムなども図を使って分かりやすく説明されており、現状を冷静に受け止められた。それを見たからといって不安が消えるわけではないが、研究者が冷静に考えを述べることや現状を正確に伝えることが視聴者に冷静さを促すことにつながるのだと感じた。
- 多くの人が今知りたいと思っている疑問を山中さんの目線を通じて、しっかり質問していて、とても面白かった。また、新しい論文の情報をアップデートしていく取り組みがずっと続いているのは、とてもいいことだと思う。ビッグデータの話なので疫学的な話だけではなく、感染者の追跡といった人権にかかわる問題、政治にかかわる問題、あるいは社会的なスティグマの問題も出てきていた。そんな中、北海道ではどのような状況になるのか、この先どう考えていくのかということを見てみたい。

(NHK側)

「NHKスペシャル」では毎週新型コロナウイルス関連の内容を放送している。新型コロナウイルスの実体を冷静にしっかりと調べ、取材をして放送している。インターネットなどで不確かな情報がひとり歩きしている状況もあるため、正確な情報を流すことがNHKの使命だと考えている。

- 4月19日(日)のNHKスペシャル「ヒグマと老漁師〜世界遺産・知床を生きる〜」を見た。84歳になる漁師の大瀬初三郎さんが知床半島のルシャにある作業小屋である番屋でヒグマと近い距離で作業をしていた。年齢に関係なくまだまだ活躍されると思うが、今は絶妙な距離感が保たれている関係が崩れないことを祈っている。
- これまでも何度か北海道ブロックで放送されてきた「ヒグマを叱る男」の全国放送版で、過去に見た映像が多いにもかかわらず、とても引き込まれた。俳優の草刈正雄さんのナレーションも合っていてとてもよかった。これまではヒグマがやせ細っても決して餌を与えなかった大瀬さんが、ヒグマが餌を確保できるよう最低限の範囲で手伝う姿は、かなりぎりぎりのことをされていて驚いた。餌を食べるヒグマを確認して涙を見せていた大瀬さんに、ヒグマや自然への愛情だけではない深い信念も感じ、大瀬さんが考える人間と自然との共存、人間とヒグマが同じ自然の恵みを分け合って生きていく世界がはっきりその映像に表れていて印象的だった。

- 4月29日(水)のNHKスペシャル「未解決事件 F i l e . 0 8 J F K暗殺前編」(総合 後 7:30~8:30)と5月2日(土)「未解決事件 F i l e . 0 8 J F K暗殺 後編」(総合 後 9:00~9:54)を見た。インターネットニュースの中に、NHKの長期にわたる緻密な取材と、その取材を基に書かれた脚本によるドラマの紹介記事があった。NHKの番組とネットニュースの連動はおもしろく、番組制作の裏側を見ることができた。
- C I Aの元幹部のインタビューもあり、非常に丁寧に取材をしており、しかも犯人とされているオズワルドと日本との関わりや、旧ソ連との関係などをドラマ仕立てにするなどして、非常にうまく制作されていたという印象を受けた。北海道にも北方領土や民族共生といった深く掘り下げるべきテーマがあると思うので、こうした手法や時間をかけた取材を通して作られた番組を見たい。
- 5月3日(日)の「赤い城 沖縄のころころ~首里城 再建の願い~」(総合 前 10:30~11:10)を見た。沖縄県の人たちにとって首里城が焼け落ちてしまったことは非常にショックな出来事だろうと思うが、番組の中身よりも取材の手法が残念に感じた。「首里城とは何か」という、ひと言では言い表せない質問は安易に思える。インタビューされた方が答えている内容ではなくて、考える表情などの要素で、なんとか取材できていたように映る。カメラを回しながら聞く手法は安易すぎると思う。
- 4月23日(木)のバリバラ「バリバラ桜を見る会~バリアフリーと多様性の宴(うたげ)~ 第一部」を見た。ふだんからこの番組を見ているが、障害のある方たちが当事者として等身大の自分を表現しており、いつも驚きを持って見ている。この回は、政権を批判しているように感じ度肝を抜かれた。ジャーナリストの伊藤詩織さんや川崎市のヘイトスピーチ規制条例成立に尽力した崔江以子さんなどが出演されており、過酷な体験から生み出された心の叫びのようなメッセージが胸を打った。また、それぞれが対話しながら共感し合うという姿を見て、とてもいい番組だと思った。一方で、再放送が直前に差し替えになったことが一部のSNSで話題になっていた。「政権の圧力に屈したのではないか」という声が高まっており、そのような批判を浴びるのは非常に残念だ。
- 「チョコちゃんに叱られる！」の出演者の民放ラジオ番組での失言に関して、番組降板や謝罪を求める署名が広がっているようだが、一方で一部のSNS上では「その出演者を起用して、女性の貧困問題やフェミニズムについて学べる番組を制作、放送してください」といった声もある。5月15日(金)の番組末尾でお詫び告知がなされてはいたが、「チョコちゃんに叱られる！」自体が問題を掘り下げていく番組であるの

だから、失敗したことを断罪しないで、失敗から学ぶというプロセスを番組として見せていくというのは、とても面白いアイデアではないかと思う。

- 「国会中継」について。検察庁法改正案の審議を行う国会中継をなぜNHKが放送しないのかという世論がとて大きくなっている。権力を監視して、視聴者の知る権利に応えるということをどのように感じているのか聞きたい。
- ネット中継なら見られるが放送では見られないということが続くと、NHKが国会中継を放送している意義や価値が薄れていくのではないか。インターネット環境がない人にもきちんと情報を届ける責任がNHKにはあると思う。「権力の監視」「知る権利を守る」という報道の基本にかかわることであり、NHKの信頼に直結する部分なので、国会中継は視聴者が納得できる方針のもとで行ってほしい。

(NHK側)

「バリバラ」、「チコちゃんに叱られる！」についての指摘については、直接の担当者がいないので、次回の番組審議会で説明する。「国会中継」については、一定の原則のもとに放送しているが、いただいた意見はしっかり受け止める。

- 新型コロナウイルス関連の報道における情報提供について。命にかかわる問題だけに、記者会見の生中継にも相当気を使っていたと思う。特に手話通訳については発言者のすぐ横で行われたり、別カメラで撮ってワイプで対応するなど、実際にろう者の方からも一定の評価の声を聞いた。一方で、手話を理解しない中途失聴者からは、改善を求める声もあると聞いている。リアルタイムの字幕対応は課題も大きいのは承知している。しかし今回の新型コロナウイルスに関する報道に伴う情報提供のあり方として、手話通訳、要約テロップ、字幕という3つのツールが、今後も改善しながら継続されることを希望している。
- SNSやインターネットではさまざまな情報が交錯し、テレビでも危機感をあおるような報道が多い中で、何が真実でどういう判断をしなければいけないのかが非常に分かりづらい時代になってきていると思う。物の見方はどの角度から見るかで変わってくる。どう受け止めて判断するかは個人なので、公共放送として、日本に暮らす人々の情報リテラシーを高めるような番組をNHKには制作してもらいたい。

(NHK側)

混とんとしている時代だからこそ、NHKに求められている

役割の大きさを感じている。公平公正で多様な見方ができるように事実を伝えていくのが大前提だが、さらに本当に期待される公共放送像、公共メディア像を追求していきたい。

NHK札幌拠点放送局
番組審議会事務局

4月北海道地方放送番組審議会休会のお知らせ

新型コロナウイルス感染拡大の影響により、4月15日(水)に予定していた北海道地方放送番組審議会は休会となりました。

NHK札幌拠点放送局 番組審議会事務局